

# 真知子

01 偽りの楽園

エッセー

星がまたたく夜空の下で、和美は遠い昔を夢を見てうなされていた。

和美の手には血まみれの包丁が握られている。足元には女が横たわっている。女はピクリとも動かない。たぶん絶命しているのだろう。確かめる勇気はなかった。

これからどうしていいのか、どうすればいいのか、動くことができず立ち止まっていた。すると臨月をむかえ膨れた和美の腹を胎児が蹴り上げた。

(そうだ誰も知らないところへいこう。この子だけは、この子だけはわたしが守ってみせる)

闇の方へ闇の方へと和美は走り出した。

\* \* \*

和美が暮らす旅館は、福岡県の博多駅裏に広がる無法地帯の入り口にある。

旅館の朝は早い。女将としてすべてを取り仕切っている和美は、夜明け前に起きだし、お客さまに気持ちよく帰っていただくため玄関前を掃除する。使用人に頼んでもかまわない仕事だが、12年前、この町に来て以来、日課として毎朝勤めている。

自分の部屋に戻ると、今年13歳になる娘の真知子を起こす。そして、朝の授業を始める。

「さあ真知子、起きなさい」

真知子は布団から起き上がると床に手をつき深々と頭を下げた。

「お母さま誕生日おめでとうございます」

「覚えていてくれたのね。ありがとう。さあ、顔を上げてタブレットを見てごらん」

和美は、読み書き計算の勉強の材料として、真知子に西洋占星術を教えている。このごろでは毎朝起きてすぐ、その日の昼のホロスコープを読むのが日課になっている。

ホロスコープとは、何年何月何日何時何分何秒にどこから見ると、どこにどんな惑星が配置されたか示した円形の図で、占いの基本アイテムである。

旅館の中しか知らない真知子にとって、星の世界は不思議に満ちていた。旅館の外には広い世界が広がり、さらに外には宇宙が広がり、遠い遠い場所に星たちは存在するといわれても、実感がわかかなかった。

真知子にとってホロスコープとは、規則通りにくるくる回り続ける針の多い時計のようなものだった。喜びも悲しみも、時とともに表れては過ぎ去る幻にすぎなかった。

「真知子、さあ読んでごらん。2078年3月2日の午後0時0分0秒の博多はどんな日だろう」

「はい、お母さま。月と金星、土星、天王星、海王星が90度です。恋愛もしくは金運、果たすべき課題、改革、夢などが、素直な感情と対立しています。救いは月と木星の60度です。成長が対立を解決する鍵です」

「そうだね。なにか突発的な出来事が状況を一変させるかもしれないね。こんなときは結論を急がず、今一度考えてみるのが大切だよ」

「はい、お母さま」

「今夜は無法地帯を取り仕切る雄馬さまが、わたしの誕生祝いにお越しくださる。真知子もきち

んと挨拶しなさい」

「はい、お母さま」

「それから、明日の朝は子探しが来る。分かっていると思うけど、いつも通りちゃんと台所の収納庫に隠れているんだよ。見つければ外の世界に連れて行かれてしまう」

「はい、お母さま」

「朝食を食べ終わったら仕事にかかりなさい。いつも言っていることだけど、女将の娘だからといって威張ってはいけないよ。素直に意見を聞いてみんなにかわいがってもらいなさい」

「はい、お母さま。今日も一日よろしくお願いします」

立ち去る真知子の後姿を見送り、和美は今日一日の無事を祈った。

\* \* \*

昼前、最後の客の見送りを終えた和美が客室に戻ると、曲がり角から使用人の声がした。

「この季節、まだ水は冷たいから、わたしが絞ってあげます」

「ありがとうございます」

和美が曲がり角を曲がると雑巾を絞る使用人の姿が目に入った。

「あんまり甘やかさないでください」

口とは裏腹に、和美は笑顔を浮かべた。使用人はお愛想笑いをかえして和美に会釈した。

「真知子、仕事が終わったら、早めにお風呂に入って、雄馬さまが新しく作ってくださった赤い着物に着替えなさい」

「はい、お母さま」

小首をかしげる真知子の姿は、今年13歳とは思えないほど幼くかわいらしかった。それは己というものを感じさせない人形のようなかわいらしさだった。

和美は真知子を心から愛おしく感じた。

\* \* \*

忙しい雄馬は、たまにしか旅館にやって来ない。

和美は、自分たち親子を救ってくれた雄馬に深く感謝していた。深い感謝はいつの間にか淡い恋心に変わり、たまの訪問は楽しみですらあった。和装の好きな雄馬のため、一番上等な藤色の着物に着替え、髪を結い上げ、紅を引きなおし、美しく装う。そんな特別な時間を楽しんだ。

「おかえりなさいませご主人さま」

夜、黒いスーツに身を包み、お供を連れた雄馬が旅館の暖簾をくぐった。

「今夜は朝まで飲み明かそう」

「どうぞお心のままに」

和美は、酒と肴の並んだ膳の据えられた和室に雄馬を案内した。

「真知子を呼びましょうか？」

和美が雄馬に尋ねた。

「まずは女将と二人で酒が飲みたい」

雄馬が目配せするとお供と使用人たちが下がった。

和美が酒を注ぐと、一気に飲み干し、雄馬が語り始めた。

「なあ女将、これは人から聞いた話なんだが、保護区育ちで何にも知らない若い娘が、親切にしてくれた会社の上司と不倫関係に陥り、身ごもったそうだ」

和美の肩がピクリと動いた。微かな変化を雄馬は見逃さなかった。

「真実を知った上司の妻は包丁を隠し持ち、愛人を訪ねたらしい。二人の間に何があったのか誰も知らない。分かっているのはもみ合いの末に妻の心臓に包丁が深く突き刺さったということだけだ。すぐに救急車を呼べば助かったかもしれない。しかし愛人は助けを呼ばず逃げた」

雄馬が、震える和美の手をつかんだ。

「殺人者が逃げる場所といったら自由区のルールが通用しない無法地帯しかない。つまりこのことだ」

雄馬の瞳が怪しく輝きだした。恐れを感じた和美は、体を引いた。すると雄馬が和美のあごに手をかけ引き寄せた。

「若い娘が無法地帯に入れば、たいてい性を売り物にさせられる。しかし、無法地帯の主は旅館の女将にした。なぜだか分かるか？」

「いいえ」

「お腹の子どもが女の子だったからだ。何も知らせず、従順な娘に仕立て上げるためには愛情を注いで育てる母親が必要だった。だから体売らせなかった」

和美の心臓はドクドクと波打った。

「自分に愛情を持つ少女を女にする。それも生まれる前からの付き合いだ。誰にでもできる遊びじゃない。面白い趣向だろう？」

激しく首を横に振る和美。

「娘がどうなるかは母親の出方次第。無垢な少女をほしがる男は山のようにいる。逆らえば娘は売り払う。従えばこれまで通り一緒に暮らせる。なあ、女将、あんたならどうする。返事を聞かせてもらおうか」

「わたし、わたしは……」

「はっきり聞かせてもらおうか！」

(本気なのかしら。たとえ話でもうかつには答えられない)

和美はうつむき小さな声で答える。

「……一緒に暮らすことを選べます」

「女将もわたしと同じ意見と言うわけだ。まあ、一杯どうだい。遠慮することはない。今日は女将の誕生祝い。存分に楽しんでくれ。そうだ、真知子を呼ぼう」

雄馬が手を叩く。使用人が返事をする。赤い着物を着た真知子が姿を現す。

「おかえりなさいませ、ご主人さま」

床に手をつきお辞儀をする真知子。

「その着物、着てくれたんだね。よく似合う。さあこっちにおいで」

雄馬が膝を叩くと、真知子が雄馬の膝の上に乗った。

「あんなに小さかった真知子も、体だけは大人と変わらない。大きくなったな～」

雄馬が真知子の頭を撫でる。嬉しそうに微笑む真知子。うつむき、肩を震わせる和美。

「さあ、お菓子を上げよう。手を出してごらん」

「はい、ご主人さま」

両手を重ねて突き出した真知子の手のひらに、雄馬が金色の紙で包まれたチョコレートを置く

。

「ありがとうございます」

「残りは女将に渡しておくから今日はもう下がりなさい」

「はい、おやすみなさい」

残念そうに去って行く真知子。無事に帰っていく真知子の後姿に笑みがこぼれる和美。すべて悪い冗談だと思う。雄馬も和美に笑い返す。

「真知子には話すな。言えは真知子を売り払う」

床に手をつき懇願する和美。

「どうか考え直してください。わたしがどんなことでもします」

しかし雄馬は黙ったまま酒を飲み干す。

「お願いします。真知子はまだほんの子どもなんです」

「大人になったら好きにしていいたいというわけでもあるまい。違うか？」

「それは……」

「その体で、逆らえば真知子が永遠に味わう苦しみを思い知れ」

床に押し倒される和美。着物の裾を割る雄馬。抵抗する和美。和美の頬を平手打ちする雄馬。結い上げた和美の髪が乱れ落ち、床にうねる。

「ことが決するまで、誰にも言えずに苦悩するといひ。苦痛こそがわたしからの誕生祝いだ」

和美は声を殺して、雄馬の仕打ちに耐えた。

\* \* \*

乱れた髪を手で撫で付けながら、和美が部屋に入ってくる。

二つ敷かれた布団の片方に、真知子が眠っている。

傷の痛みに顔をしかめる和美。真知子の隣に膝をつく。

(ごめんよ、真知子。わたしが馬鹿だった。ここは男の楽園。女にとっては生き地獄。守ってあげられるなんて夢のまた夢。女将の座だってあの人の気まぐれで、わたしの実力ではなかった。ああ、どうしよう。どうしたらいいの?)

涙を流す和美。目を覚ます真知子。

「お母さま、泣いているの？ 困ったことがあるならやさしいご主人さまに話したらいいのに。きっと助けてくれます」

和美の背中をなでる真知子。真知子の顔を覗き込む和美。何の疑いも持たないキラキラした瞳が見返している。

(そうだ。わたしはどうなってもいい。真知子だけはこの地獄から逃がさなくちゃ)

「お母さま、どうなさったの？」

「今朝話した通り、明日の朝、役人がここに来る」

「心配要りません。ちゃんと隠れていられます」

「いいかい、真知子。お前は役人と一緒に行きなさい」

「どうして？ わたし行きたくない」

「悪魔がお前を狙ってる。逃げなくちゃだめなんだ」

「ご主人さまにお願いすれば、きっと守ってくれます」

小首をかしげる真知子。そのあどけない仕草にますます不安が募る和美。

(こんなにも信じ切っている真知子が裏切られるなんて、耐えられない。ああ、どうしたらいいの。自分のものにするという約束だってあてにはならない。飽きたら売られてしまうかもしれない。今までが幸運すぎた。それも仕組まれた幸運。今この瞬間にもすべてが失われるかもしれない。いつか売られてしまうなら、今役人に引き渡す方がいい)

「お母さま？」

「ここにいる限り、どんなに頑張っても地獄が待っている。だからお願い、誰にも言わず、黙って旅立っておくれ。幸せをつかんで欲しい。ここを出て本物の楽園を見つけて欲しい」

「本物の楽園？」

「そう。頑張れば頑張るだけ幸せになれる世界のことだよ。今は分からなくてもいい。でも忘れないで、覚えていて欲しい」

廊下から足音が響く。真知子を抱きしめる和美。雄馬が入ってくる。

「なかなか戻ってこないから見に来たんだ。やっぱり真知子のところにいたのか」

雄馬にニコニコ微笑む真知子。

「まだ起きていたのか真知子、わたしの部屋に来なさい。眠くなるまで相手をしてあげよう」

「はい、ご主人さま」

嬉しそうに立ち上がる真知子。引き止める和美。

「女将はここに残って休め。真知子はわたしに任せろ。子探しが終わるまで預かる」

雄馬に手を引かれ部屋を出て行く真知子。閉まる扉。床に崩れ落ちる和美。

(神さま、どうか真知子をお守りください)

和美は、心の中で祈り続けた。

\* \* \*

深夜、不安に駆られた和美は、雄馬の部屋の扉に耳を当てた。

中からは真知子の笑い声が聞こえてくる。どうやらトランプで遊んでいるようだ。

ほっとする和美。振り返り、振り返り、自分の部屋に戻って行く。

\* \* \*

眠れぬ夜を過ごした和美は、いつも通り玄関前の掃除をした。しかし、部屋に戻っても真知子はいない。一人ホロスコープを眺めた。

昨日に引き続き、月と金星、天王星、海王星が90度。木星60度と土星90度が消えて、水星150度が現れている。

(情報を活用して変革させる時なのかもしれない。チャンスは一度きり。今朝を逃せば、真知子の未来はない)

立ち上がる和美。役人を迎えるため、玄関に向かう。

\* \* \*

子探しは、無法地帯全体で一斉に行われる。早朝、20人体制で建物の中をくまなく見て回る。和美の旅館にも、初老の役人がやってきた。

和美は、祈るような気持ちで雄馬が泊まる部屋に役人を案内した。そしてそっと耳打ちした。「わたしには今年13歳になる娘がいます。どうか娘を連れて行ってください。この地獄から真知子を助けてください」

静かにうなづく役人。扉をノックする。すると雄馬が顔を出し、部屋に招き入れる。「今日は子探しの日でしたか。さあ、どうぞ探してください。わたし以外誰もいませんが」  
押入れに、風呂場に、トイレ、部屋中探し回る役人。しかし真知子は見つからない。「真知子、真知子、どこなの？ 返事をしてちょうだい！」

大声で叫ぶ和美。しかし、返事は返らない。

役人はもう一度風呂場に戻り、ポケットからボールペンを取り出し、そっと床に置いた。「どうやら誰もいないようだね。ほかの部屋を見に行こう」

「どうか、見捨てないでください。確かに真知子はいるんです。見つけてください」

役人を引き止める和美。

「やめなさい。いない人間を見つけることはできない」

役人から和美を引き離す雄馬。

立ち去る役人。

部屋に残される和美と雄馬。

「自分が何をしたのか分かっているだろうな」

和美に平手打ちする雄馬。絶望で声もでない和美。

「ここはもう安全だ。真知子を連れてこい！」

雄馬のお供が、真知子を連れて入ってくる。真知子は花嫁衣裳のような真っ白いドレスに身を包み微笑んでいる。

「真知子、お前いったいどこにいたの！」

「お母さま、台所の収納庫です。いつもの場所にいました」

(こんな単純な嘘にだまされるなんて。わたしはなんて愚かなんだろう！)

「お母さま、ちゃんと隠れていたから、ご主人さまが今から真知子をいいところへ連れて行ってくださるそうです」

「だめよ！」

高笑いする雄馬。

「は一はは、よそへやるのがだめなら、ここに残すのか。さあ、選べ！」

「わたしが何でもします。真知子には手を出さないで！」

「駄目だ。選べ！」

(もう逃げられない。助けもこない。受け入れるしかないなら、少しでも長くそばにいてやりたい)

「さあ、答えろ！」

「……せめて一緒にいさせてください」

「いいだろう。その願い、叶えてやろう」

雄馬が合図すると、お供が和美を取り押さえた。

「さあ真知子、こっちへ来なさい」

真知子を布団に寝かせる雄馬。

「少し痛い但我慢しなさい。大人になるために必要な痛みだ」

うなづく真知子。うなだれる和美。真知子のドレスに手をかける雄馬。膨らみかけた胸元が見えた瞬間、扉の外で役人の声がした。

「忘れ物です。あけてください」

お供を振り切り、扉の鍵を開ける和美。役人が入ってくる。

「その子が真知子さんだね」

「はい、そうです。わたしの娘です！」

必死にうなづく和美。雄馬に向かって宣言する役人。

「黙って差し出せば、隠したことは公にしない。今の地位を失うことはない」

しづしづ真知子を引き渡す雄馬。真知子の手を取り、和美に向き直る役人。

「この子は未成年だ。無法地帯で暮らしていてもわたしたちの法律で守られている。連れて行くことができる。しかしあなたは違う。ここのルールに縛られている。かわいそうだが、連れて行くことはできない」

「はい、承知しています。どうか真知子をお願いします」

「いやです。わたし行きたくない！」

和美にすがりつく真知子。

「大丈夫、星たちがお前を守ってくれる」

真知子の額に口づけをする和美。

「お母さま～！」

「幸せになっておくれ」

和美は真知子を、最上の笑顔で送り出した。